

西海道における軒丸瓦一本づくり

主税 和賀子

1. はじめに

本稿では、西海道における軒丸瓦一本づくりについて、現状を把握することを目的とする。日本列島では、6世紀後半の飛鳥寺造営以降、造寺技術が伝えられ、その際に瓦をつくる技術ももたらされた（『日本書紀』巻21 崇峻元年）。遺跡から出土する瓦の文様や作り方を観察することで、およそその年代や地域の特徴を把握することが可能である。特にこの40年ほどで、瓦の作り方、製作技法に着目した研究が増加してきた。各地で製作技法に関する事例が蓄積されてきたこともあり、全国を対象にした製作技法の総括的検討が研究会のテーマとして取り上げられるようになってきた（奈良文化財研究所 2018, 2019）。

本稿で扱う西海道についても、瓦の製作技法に関する検討が進められており、そのような中でも、軒平瓦や平瓦の製作技法については、国分寺造営に伴って一枚づくりを採用する地域が多いなど、一定の共通見解が得られてきたと考えられる（栗原 1990, 1999, 梶原 2000, 奈良文化財研究所 2019）。そこで本稿では、各地で発掘調査が増加し、従来個別に事例報告されている軒丸瓦の一本づくり技法に着目し、西海道における現状を整理したい。

2. これまでの研究状況と課題

軒丸瓦の一本づくりは、全国で確認されている。一本づくりについては先行研究で整理されており、A～D技法の4つに類型化されている（鈴木 1990）。A技法は筒形成形台成形、B技法は粘土紐巻きあげ成形で、後述する神ノ前窯跡や月ノ浦窯跡出土の例が挙げられている。C技法は瓦当面嵌め込み成形で、後述する興善寺廃寺出土例が挙げられている。Dは型造り成形で、いわゆる横置型一本作りと呼ばれている方法である。近年では、横置型一本作り技法と国分寺造営期の造瓦技術の展開の関連について言及されている（梶原

2008）。また一本づくり技法を研究会のテーマにして全国的傾向を把握する動きもあるが（奈良文化財研究所 2018, 2019）、地域によって一本づくり技法の内容や時期が異なるため、全国的な議論が難しい状況である。本稿で対象とする西海道は、一本づくり技法が他地域とは様相が異なることも指摘されている（山口 2011）。

西海道では、神ノ前窯跡出土の無文軒丸瓦（石松・高橋 1979）や、興善寺廃寺出土の鬼面文軒丸瓦・単弁八葉軒丸瓦（野田編 1980, 広瀬 1980）、月ノ浦1号窯跡出土の単弁軒丸瓦（石松・舟山 1983）で一本づくりの瓦が早くに報告されている。特に西海道では、後述するように、一本づくり技法が西海道内の造瓦技術の展開のあり方と関連するため、その現象を把握することは重要である。

西海道では、朝鮮半島や畿内でみられる瓦当文様や、観世音寺・大宰府政庁を中心とした大宰府史跡で主に使用された「大宰府系瓦」の瓦当文様の影響を受けた瓦が広くみられる。西海道の瓦研究で基礎となる小田富士雄の一連の研究では、大宰府系瓦の影響を受けた瓦が西海道各地の国分寺を中心とした遺跡で出土することから、国分寺造営時に大宰府から各国へ技術的援助があり、大宰府文化圏のようなものがこの時期に成立したと評価されてきた（小田 1957 a, 1957 b, 1958 a, 1958 b）。そのため、大宰府系瓦がどのように成立したのか、その成立過程が一つの議論となっている。大宰府系瓦の成立については、一本づくり技法との関連を指摘した森郁夫の研究がある。森は、大宰府系瓦の一つである老司式軒丸瓦の特徴として、瓦当裏面下半部周縁が堤状に高く作られることがあり、これは肥後地域で主にみられる、一本づくりから派生した「技法Ⅱ」（野田編 1980）と関連があるとして、肥後の工人の関与を指摘した（森 1983）。しかし、老司式軒丸瓦と肥後の瓦の年代的矛盾によりこの説は否定されており、近年では筑前や豊前で出土している朝鮮半島系瓦と関連する可能性も指摘されている（高橋 2007, 杉原 2007）。大宰府系瓦の成立過程と一本づくり技法の展開の関連の有無を調べるには、まずは西海道における一本づくり軒丸瓦の現状を把

握する必要がある。

3. 西海道における一本づくり軒丸瓦（図1～3、表1）

西海道出土の古代瓦にみられる主な一本づくりは、瓦当と円筒状の丸瓦を各々製作し、両者を接合して不要部分を除去するという方法である。特徴としては、多くの資料で瓦当裏面の下端に凸帯が残る。また、瓦当裏面に一周するようなナデ調整がみられる場合や、円筒状丸瓦を半裁した際の工具痕（または糸切痕）が丸瓦側面延長上の瓦当側面に確認されることが多い。一本づくりの中でも細部で違いがあり、瓦当裏面に別作りした円筒状丸瓦を接合したり、瓦当裏面に円筒状の丸瓦を製作するもの（Ⅰ－1）と、円筒状丸瓦を瓦当に嵌め込むもの（Ⅰ－2）がみられる（図1）。Ⅰ－1は丸瓦の先端が瓦当裏面にまでしか到達しない。鈴木の本技法に近い。それに対して、Ⅰ－2は丸瓦の先端が瓦当の周縁部を形成する。（鈴木1990）のC技法、（野田編1980）の技法Ⅰに相当する。他地域で確認される縦置き型一本づくり（鈴木の本技法）や横置き型一本づくり（鈴木の本技法）は、西海道では確認されていない。

一本づくりではない軒丸瓦は、瓦当と別作りして半裁した丸瓦を接合する接合式である（Ⅱ）。西海道出土の軒丸瓦では、およそ3種の接合方法が確認される（図1）。1つめは半裁した丸瓦を瓦当に被せる方法（Ⅱ－1）、2つめは半裁した丸瓦を瓦当裏面に接合する方法（Ⅱ－2）、3つめは瓦範に途中まで瓦当の粘土を詰めた後に半裁した丸瓦を接合し、残りの瓦当分の粘土を付加するのに合わせて丸瓦を固定する方法（Ⅱ－3）である。

西海道出土の古代瓦のうち、現在管見で確認されている一本づくり軒丸瓦は表1、図2の通りである。主に、筑前、筑後、肥後地域で確認されている。どの地域も早い時期から寺院が造営された地域である。そのなかでも、筑前・筑後ではⅠ－1が多く、肥後ではⅠ－2のみが確認される。一方、同じく早くから多くの寺院が造営された豊前では、一本づくり軒丸瓦がほとんど確認されてい

ない。上坂廃寺跡出土の百済系単弁八葉軒丸瓦でのみ確認されているが、こちらの製作技法については一本づくりか否かについて賛否両論ある。当該資料を実際に観察した結果、瓦当裏面下端にケズリ面を伴う凸帯残り、瓦当裏面には一周するナデ調整が確認され、丸瓦側面延長上の瓦当側面には円筒状丸瓦を半裁したときについたと考えられる工具痕が確認されることから、本稿では本資料を一本づくりとして位置づけたい。

筑前の塔原廃寺や日向の下北方塚原第2遺跡でも、瓦当裏面下端に凸帯をもつ軒丸瓦が出土している。但し、下北方塚原第2遺跡の報告書では接合式と報告されており（西嶋編2011）、塔原廃寺の報告書では特に製作技法については触れられていない（宮小路1967）。実見していないので断定はできないが、老司式軒丸瓦や豊前の新羅系軒丸瓦にみられるような、接合式でありつつも瓦当裏面に凸帯をもつ事例の可能性が高い。一方、肥後の興善寺廃寺出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、先行研究において一本づくり（Ⅰ－2、瓦当嵌め込み式法）とされているが（鶴嶋1991、金田1997）、実際に資料を観察した結果、瓦当裏面に半裁した丸瓦を接合した痕跡がみられ、また、瓦当周縁部は何度も粘土を付加することによって成形されている様子が観察された。よって、本資料は通常の接合式の可能性が残る。

4. 今後の課題

以上、報告が増加してきた一本づくり軒丸瓦について述べてきた。その結果、筑前、筑後、肥後地域で主に一本づくり軒丸瓦が確認され、その中でも筑前・筑後ではⅠ－1、肥後ではⅠ－2が主体を占めることがわかった。今後は、一本づくり軒丸瓦と接合式軒丸瓦との関連について検討を進めることが課題である。この検討を進めることで、西海道において広く影響を及ぼした大宰府系瓦の成立過程について、より検討を深めることが可能となる。

謝辞

資料の実見に際しては、諸機関並びに多くの

方々にお世話になりました。記して深く感謝申し上げます。

【参考文献】

石松好雄・高橋章, 1979, 「Ⅲ調査の内容 B 遺物 2 瓦類」『神ノ前窯跡』, 太宰府町文化財調査報告書第2集, 36-38. 太宰府町教育委員会.

石松好雄・舟山良一, 1983, 「月ノ浦窯跡の小型瓦」『古代研究』25・26, 95-99.

江本直編, 1980, 『興善寺Ⅱ』, 熊本県文化財調査報告第45集, 熊本県教育委員会.

大塚紀宜・松尾奈緒子・藏富士寛編, 2013, 『那珂64』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1191集, 福岡市教育委員会.

小田富士雄, 1957 a, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開 (一)」『九州考古学』(1), 8-9.

小田富士雄, 1957 b, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開 (二)」『九州考古学』(2), 8-10.

小田富士雄, 1958 a, 「九州に於ける法隆寺系宇瓦の展開」『九州考古学』(3) (4), 7-11.

小田富士雄, 1958 b, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開 (三)」『九州考古学』(5) (6), 10-11.

柏原孝俊・山崎頼人編, 2014, 『上岩田遺跡Ⅴ』, 小郡市文化財調査報告書第277集, 小郡市教育委員会.

梶原義実, 2000, 「国分寺造営期の瓦供給体制ー西海道諸国の例からー」『考古学雑誌』86 (1), 27-62.

梶原義実, 2008, 「横置型一本作り軒丸瓦の諸技法とその年代」『名古屋大学文学部研究論集 (史学54)』, 59-81.

片岡宏二編, 1998, 『井上廃寺Ⅰ』, 小郡市文化財調査報告書第122集, 小郡市教育委員会.

片岡宏二, 2004, 「筑後における奈良時代以前の古瓦」『福岡大学考古学論集ー小田富士雄先生退職記念ー』, 571-584, 小田富士雄先生退職記念事業会.

金田一精, 1997, 「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』10, 20-40.

栗原和彦, 1990, 「九州における平瓦一枚作り」『九州歴史資料館研究論集』15.

栗原和彦, 1999, 「奈良時代 大宰府の瓦は縄目瓦であったー第98次南北溝SD2340調査からー」『九州歴史資料館研究論集』24.

久留米市教育委員会, 1985, 『東部地区区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第4集』, 久留米市文化財調査報告書第43集, 久留米市教育委員会. 酒井仁夫編, 1979, 『神ノ前窯跡』, 太宰府町文化財調査報告書第2集, 太宰府町教育委員会.

酒井仁夫・高橋章, 1984, 「豊前地方の8世紀代の軒瓦についてー上坂廃寺跡出土瓦を中心にー」『九州考古学』59, 47-57.

坂田邦洋編, 1994, 「玉名郡衙」『玉名市歴史資料集成第12集ー市制40周年記念ー』, 玉名市・秘書企画課.

島津義昭, 1983, 「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』上, 745-769, 吉川弘文館, 東京. 下村智・荒牧宏行編, 1992, 『那珂遺跡4』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集, 福岡市教育委員会.

菅波正人編, 1994, 『那珂10』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集, 福岡市教育委員会.

杉原敏之, 2007, 「老司Ⅰ式軒先瓦」『観世音寺考察編』, 93-100, 九州歴史資料館, 福岡.

鈴木久男, 1990, 「一本作り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』, 189-214, 京都国立博物館, 京都. 高橋章, 2007, 「筑紫観世音寺軒先瓦の編年と課題」, 西日本古瓦研究会資料.

鶴嶋俊彦, 1991, 「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学 三島格会長古稀記念肥後考古』8, 105-133.

奈良文化財研究所, 2018, 「第18回 シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦー一本づくり・一枚づくりの展開1ー」発表要旨.

奈良文化財研究所, 2019, 「第19回 シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧー一本づくり・一枚づくりの展開2ー」発表要旨.

西嶋剛広編, 2011, 『下北方塚原第2遺跡』, 宮崎市文化財調査報告書第82集, 宮崎市教育委員会.

野田拓治編, 1980, 『興善寺Ⅰ』, 熊本県文化財調査報告第45集, 熊本県教育委員会.

広瀬正照, 1980, 「第Ⅲ章調査 2. A地区の調

査(1)第1号遺構ハ.出土遺物 瓦」『興善寺 I』, 160-171, 熊本県教育委員会.

松本雅明, 1964, 「託麻郡家址調査報告－熊本市大江町渡鹿A遺跡について－」『熊本史学』27, 1-11.

松本雅明, 1965, 『陳内廃寺調査報告』, 城南町史編纂会.

宮小路賀宏, 1967, 「第6遺物 1古瓦」『塔原廃寺』, 福岡県文化財調査報告書第35集, 福岡県教育委員会.

森郁夫, 1983, 「老司式軒瓦」『大宰府古文化論叢』下, 311-331, 吉川弘文館, 東京.

山口亨, 2011, 「九州でいう軒丸瓦「一本作り」技法について」『古文化談叢』65(3), 151-153.

【挿図出典】

図1, 2, 表1: 筆者作成。

図3: 石松・舟山, 1983; 下村・荒牧編, 1992; 石松・高橋, 1979; 大塚・松尾・藏富士編, 2013; 菅波編, 1994; 柏原・山崎編, 2014; 片岡編, 1998; 片岡, 2004; 久留米市教育委員会, 1985; 酒井・高橋, 1984; 坂田編, 1994; 松本, 1964; 松本, 1965; 島津, 1983; 江本編, 1980をもとに筆者作成。

主税 和賀子(ちから わかこ)

元大野城市心のふるさと館運営課職員

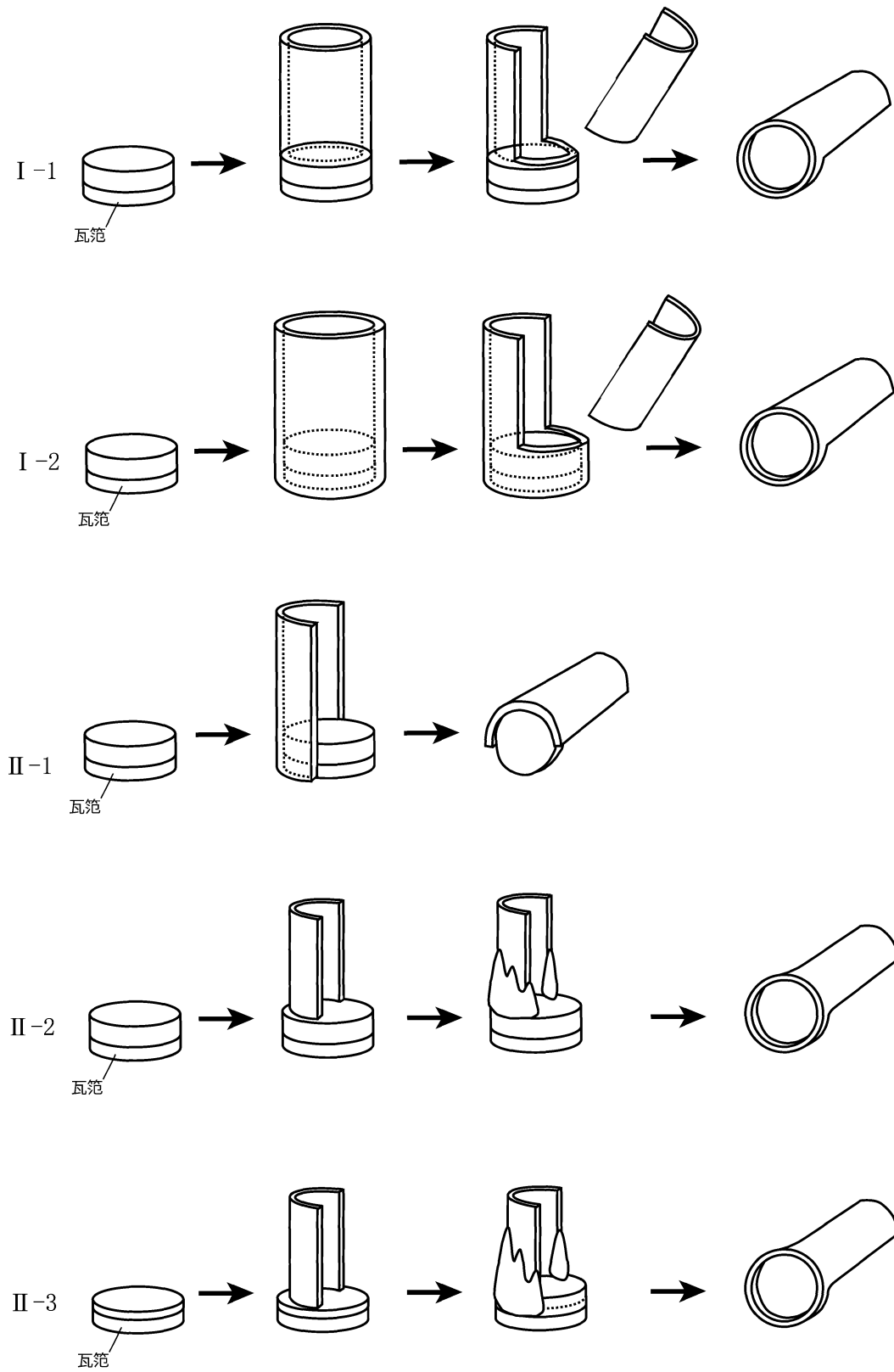


図1 軒丸瓦成形技法の分類

表1 西海道出土の一本づくり軒丸瓦

旧国名	遺跡名	文様・型式名	製作技法	備考	図2No.	図3No.
筑前	月ノ浦1号窯跡	単弁八葉蓮華文	I-1	丸瓦部は粘土紐巻き上げの痕跡あり	1	1-1
	那珂遺跡群			丸瓦部は泥条盤築技法	3	1-2
	月ノ浦1号窯跡	単弁九葉蓮華文	I-1	丸瓦部は粘土紐巻き上げの痕跡あり	1	2
	神ノ前2号窯跡	無文	I-1	丸瓦部は泥条盤築技法	2	3
	那珂遺跡群	単弁七葉蓮華文	I-1	丸瓦部は泥条盤築技法	3	4
	那珂遺跡群	単弁六葉蓮華文	I-1	丸瓦部は泥条盤築技法	3	5
筑後	上岩田遺跡	単弁六葉蓮華文、	I-1	丸瓦部に竹状模骨痕あり	5	6-1
	井上廃寺跡	井上廃寺軒丸瓦1類			6	6-2
	へボノ木遺跡	へボノ木1a式			7	6-3
	へボノ木遺跡	へボノ木1b式	I-1	—	7	7
	へボノ木遺跡	へボノ木1c式	I-1	—	7	8
	へボノ木遺跡	へボノ木4式	I-1	—	7	9
	観興寺	観興寺1式	I-2	—	8	10
豊前	観興寺	観興寺2式	I-2	—	8	11
	上坂廃寺跡	百済系単弁八葉蓮華文	I-1	—	9	12
肥後	立願寺廃寺跡	単弁八葉蓮華文・A型	I-2	—	10	13
	立願寺廃寺跡	複弁八葉蓮華文・B型	I-2	—	10	14
	立願寺廃寺跡	複弁八葉蓮華文・C型	I-2	—	10	15
	渡鹿A遺跡	単弁八葉蓮華文	I-2	—	11	16
	陳内廃寺跡	単弁八葉蓮華文・Ia式	I-2	—	12	17
	陳内廃寺跡	単弁八葉蓮華文・Ib式	I-2	—	12	18
	興善寺廃寺跡	鬼面文・Ia式	I-2	—	13	19
筑前	塔原廃寺跡	単弁八葉蓮華文	接合式?	—	4	
肥後	興善寺廃寺跡	単弁八葉蓮華文・Ib式	接合式?	—	13	
日向	下北方塚原第2遺跡	単弁八葉蓮華文	接合式?	—	14	

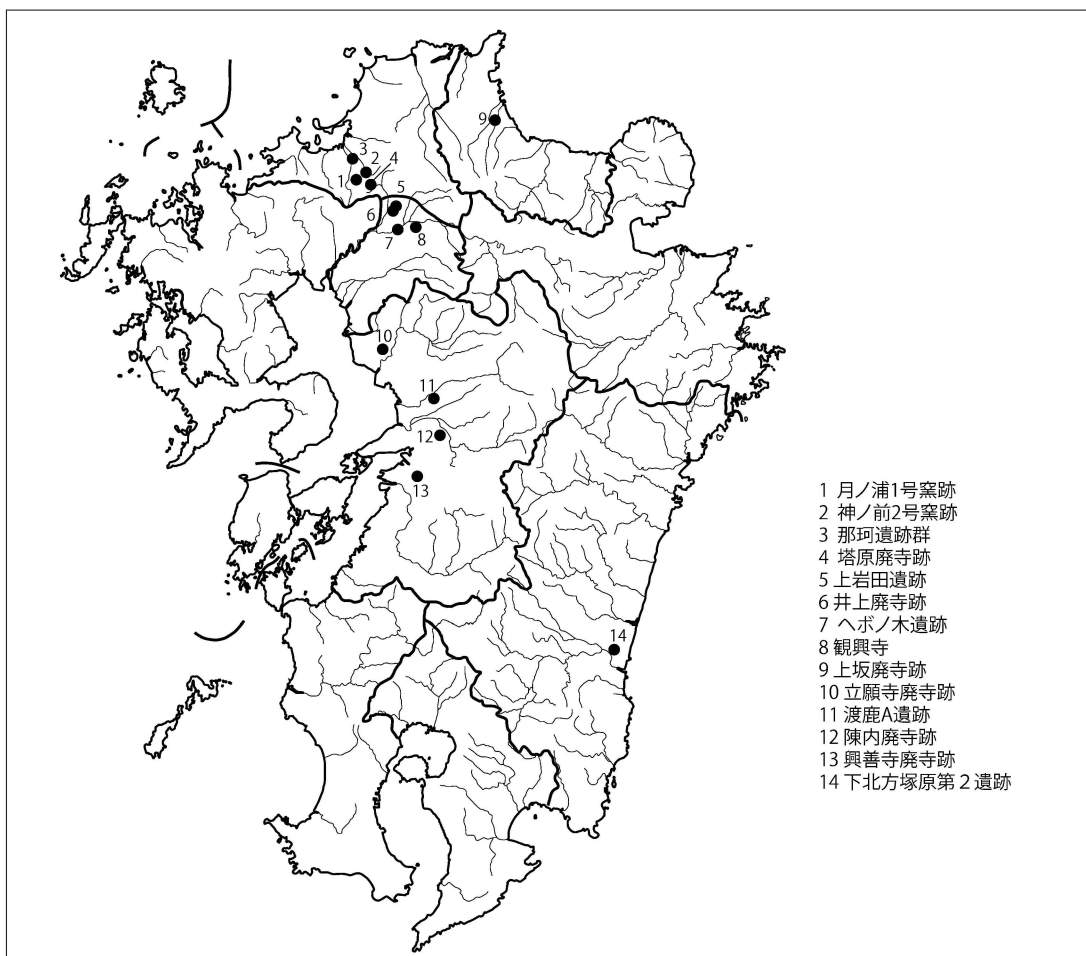
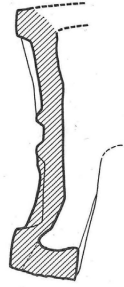
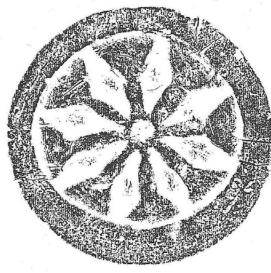


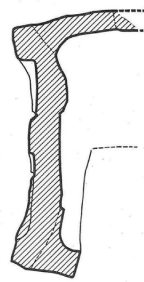
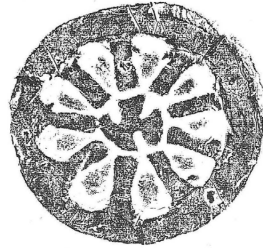
図2 西海道の一本づくり軒丸瓦出土遺跡



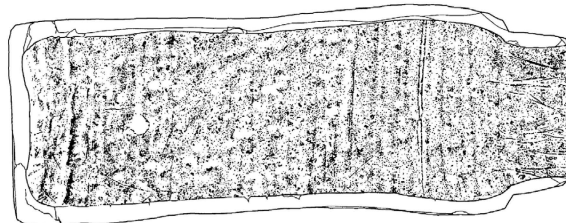
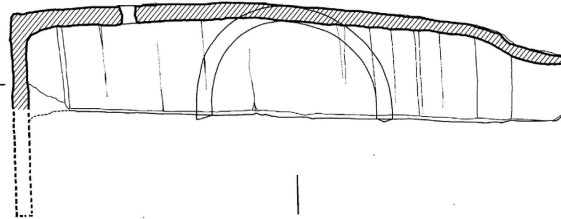
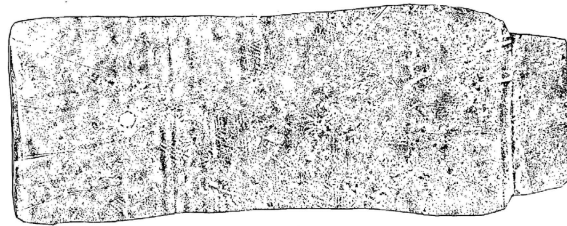
1-1 月ノ浦1号窯跡



1-2 那珂遺跡群



2 月ノ浦1号窯跡

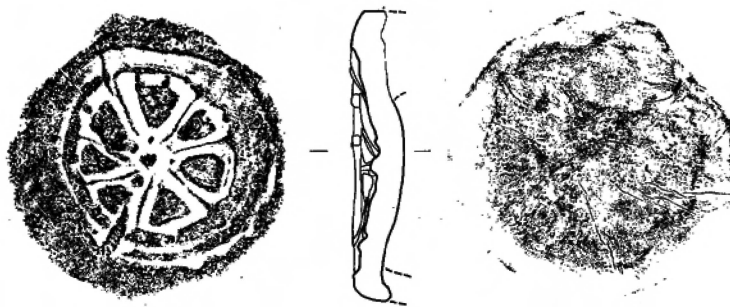


3 神ノ前2号窯跡

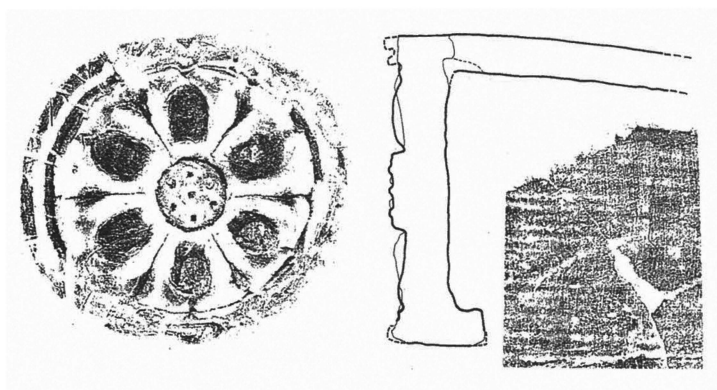
図3-1 一本づくり軒丸瓦 (1~2 : S=1/4, 3 : S=1/6)



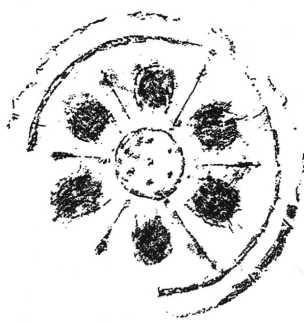
4 那珂遺跡群



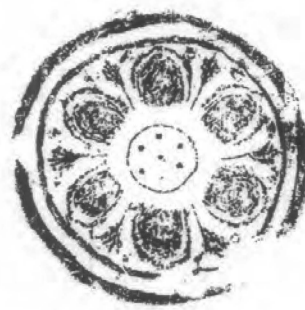
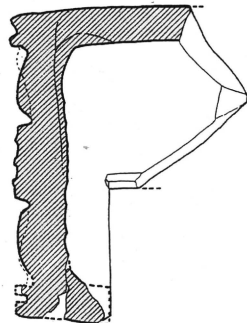
5 那珂遺跡群



6-1 上岩田遺跡



6-2 井上廃寺跡



6-3 ヘボノ木遺跡

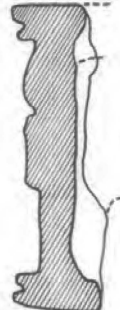
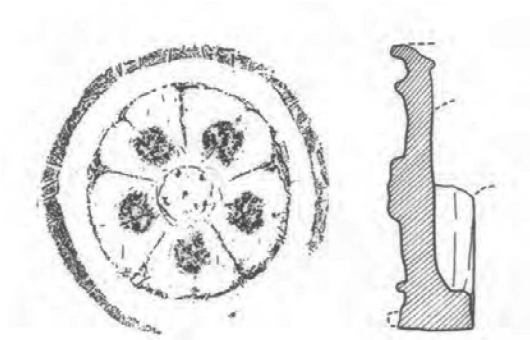


図3-2 一本づくり軒丸瓦 (S=1/4)



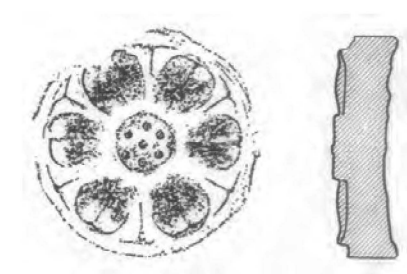
7 ヘボノ木遺跡



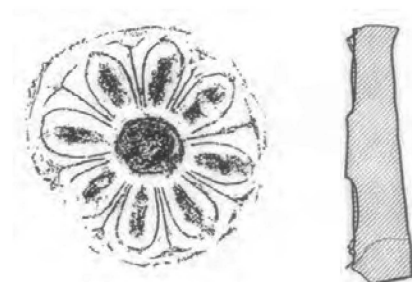
8 ヘボノ木遺跡



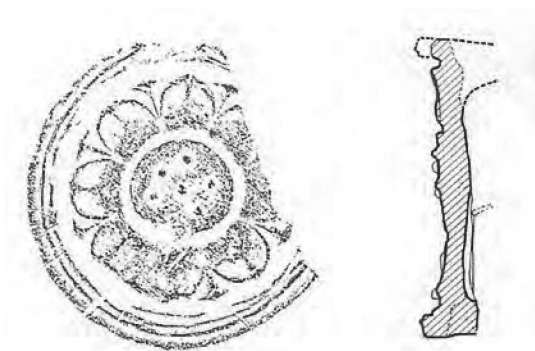
9 ヘボノ木遺跡



10 観興寺

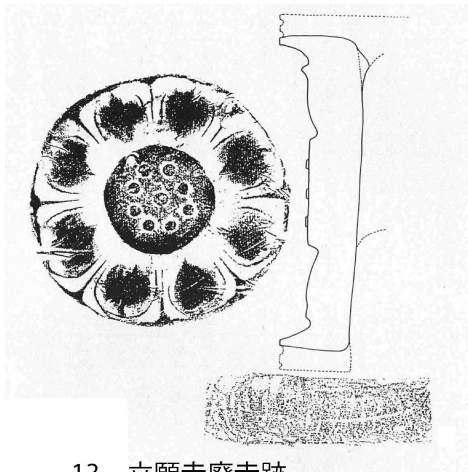


11 観興寺

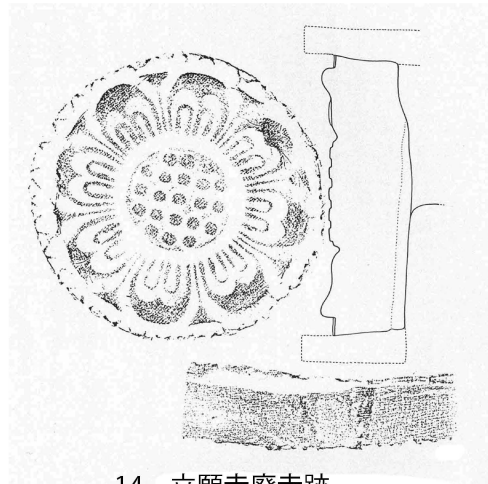


12 上坂廃寺跡

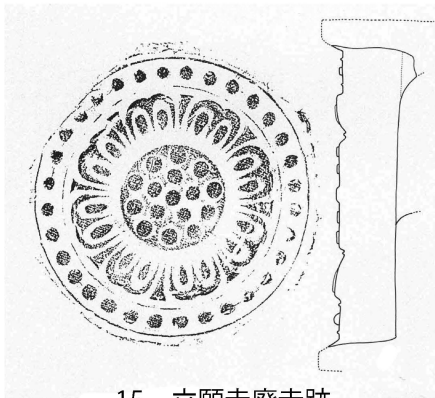
図3-3 一本づくり軒丸瓦 (S=1/4, 9は縮尺不同)



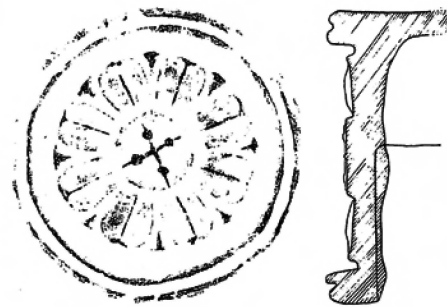
13 立願寺廃寺跡



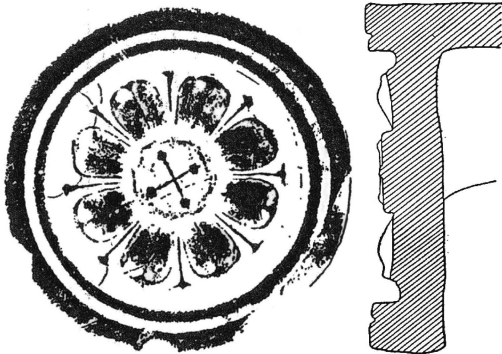
14 立願寺廃寺跡



15 立願寺廃寺跡



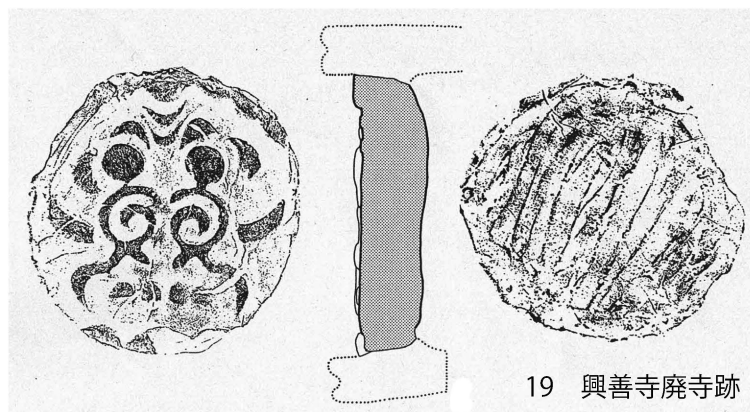
16 渡鹿 A 遺跡



17 陳内廃寺跡



18 陳内廃寺跡



19 興善寺廃寺跡

図3-4 一本づくり軒丸瓦 (S=1/4)